

アレックス・ラ・グーマ 人と作品 1

闘争家として、作家として



「ゴンドワナ」8号

(1987)

22～26ページ

1. 闘争家として

◎解放の前夜

南アフリカの事態は非常に緊迫している。ボタ白人政権は、いよいよ追いつめられてきた。外では、国連をはじめとする国際世論が厳しく、経済制裁も強まっており、内では、アバルトヘイト体制では立ち行かなくなった南ア経済への不満から人種差別撤廃を打ち

出した財界のつきあげを受けている。ザンビアに本部を置く非合法黒人解放組織アフリカ民族会議（ANC）は、果敢な武力闘争の手を緩めていない。83年11月に結成された反アパルトヘイト国内組織「統一民主戦線」（UDF）には、650以上の組織、二百以上のあらゆる人種の人々が参加しており、その力は圧倒的だ。ロンドンの反アパルトヘイト団体 IDAF 製作の記録映画「燃えあがる南アフリカ！—南ア組織 UDF の記録」を見ると、もはや何びとも押し寄せる怒濤はとめようがない、という思いがひしひしと伝わってくる。指導者のひとりアラン・ブーサック牧師の演説に呼応する聴衆の姿は、50年代、60年代のアメリカ黒人公民権運動を率いたマーチン・ルーサー・キング師の演説に歓呼する人々の姿に重なって仕様がなない。それは、もはやとどまるところを知らぬ歴史のうねり、と言ってよい。

そんな危機感の強まるなか、白人政権は5月6日の総選挙で、国際世論に反して圧勝し、166議席のうち123議席（改選前110、定数178のうち12は任命議員）議席を確保した。そればかりか、アパルトヘイト政策体制の維持を訴えた右翼保守党の進出で、結果的にはますます保守化の傾向を強める勢いである。

5月31日付の朝日新聞（朝刊）は、29日未明、南ア特殊部隊がモザンビークの首都マプトの ANC 本部を襲撃した、と報じた。また、6月2日には、ボタ大統領が「日本を含めた西側先進七か国首脳に対して書簡を送り、人種問題解決に向けて、同大統領自身が黒人諸組織の代表と話し合いに入る用意がある旨を説明するとともに、この話し合いを可能にするために、先進諸国が非合法黒人解放運動組織アフリカ民族会議（ANC）に『暴力主義を放棄するよう』圧力をかけてほしいと訴えた」との記事を掲載した。そもそも ANC に武力闘争路線を強いたのは「シャープビル虐殺事件」での白人側の蛮行がきっかけだ。ANC はルツーリ初代議長のはじめから、平和的な話し合いを提唱してきた。獄中に居る前議長ネルソン・マンデラ氏も、現議長オリバー・タンボ氏も同じことを言い続けている。日本アジア・アフリカ・ラテンアメリカ (AALA) 連帯委員会の招きで、ANC 東京事務所開設の具体化を図るために来日した ANC の指導者のひとりダン・シンディ氏（ポール・ラベロ

ソンと共に来日)も、その路線が変わっていないことを言明した。(6月3日夜、京都立命館大学で行なわれた AALA アフリカ研究会にて、翌日、ムアンギさんも同行して、清水寺などを訪問されたとのこと。)

1. マンデラ氏を含むすべての政治犯を即時釈放すること。
1. ANC を含む非合法とされる組織をすべて認めること。
1. 非常事態宣言を解き、黒人地区に駐留する軍隊を引き上げること。
1. それらの意志をはっきり示すこと。

以上の4つの条件が満たされれば、いつでも白人政府と話し合う準備があると……。

歴史に照らしてみても、無恥厚顔な「悪あがき」を演じ続ける白人政府側の非は、誰の目にも明らかだ。白人政権のますますの孤立化は必然の結果である。

そんな潮流を察知してか、日本政府は4月に ANC 現議長オリバー・タンボ氏を招待した。8月には、UDF の若き指導者アラン・ブーサク師を正式に招く、という。今日のハイテク産業を支えるクロム、マンガン、モリブデン、コバルトなどの希少金属（レアメタル）の大半を「南アフリカ共和国」に依存しているニッポンとしては、白人政権崩壊後の次期政権に、何とか早めに媚を売っておかねばならぬ、というわけである。新聞では40万ドルの資金援助、ANC 東京事務所設置の約束、などと報じられたが、中曽根首相との会談の翌日、アラン・ブーサク師の来日依頼に出かけた政府高官が、昨日の中曽根首相の約束は、あれはあくまで、民間団体の援助で ANC 事務所を東京に開設することに関して政府は一切関知しないということにして、と語ったはなしを耳にすると、人間として、むしろ哀しい、恥ずかしい。拘禁されても、弾圧されても、毅然とした人間としての態度と誇りを持ち続けてきたアフリカ人、自らの利害にのみ窮々とし、火事場ドロボウのように他人の富を狙い、掠め取るニッポンジン、ニッポン政府。最後の最後まで醜態を演じ続けるボタ白人政権—最近の一連の動きは、解放前夜近し、の感を抱かせる。歴史の流れは、誰にも止めようがない。

◎南アフリカ人として

黒人も、白人も、「カラード」も、そしてアジア人も、手を携えて共存しあえる統合民主国家「南アフリカ」を願いながら、アレックス・ラ・グーマは、1985年10月11日、夢なかば、異郷の地キューバの首都ハバナで死んだ。日本の各紙はその死を報じなかったが、民族の真の解放を信じて勇敢に斗い続けた闘争家として、作家として、歴史にそして文学史に、はっきりとその名を刻んで死んでいった。

1925年2月20日、ラ・グーマは、ケープタウンの「カラード」居住地区「第六区」に生まれた。母方の祖母は、インドネシアからの移民で、オランダ系とインドネシア系の血を引いており、祖父はスコットランド系の移民であった。一方、父方の祖父母はマダガスカルからの移民で、インドネシア系とドイツ系の血を引いていた。19世紀初頭に、ボーア人（先住オランダ系移民）からケープ地方の支配権を奪ったイギリス人は、世界経済の流れに便乗して奴隷制そのものを廃止し、それまでボーア人が保持していた奴隷を解放した。そんなイギリス人の支配を嫌ったボーア人の大半は、内陸部への大移動（グレート・トレック）を開始したが、残ったボーア人は、奴隷にかわる安価な労働力として、旧オランダ植民地から大量に移民を輸入した。母方の祖父、父方の祖父母はその時の移民である。（ラ・グーマのラは、東インド諸島の特定の地域に見られる名前である、とラ・グーマ自身、ある専門家から教えられたことがあるという。）従って、母ウィルヘルミナ・アレクサンダーも、父ジェイムズ・ラ・グーマも、アジア人とヨーロッパ人の血を引いた、言わば「歴史」の落とし子であったと言える。そのような両親のもとに生をうけたアレックス・ラ・グーマもまた、必然的に、政治や社会的関係が生んだ「いわゆる」カラードではあったが、粉れもなく南アフリカの地に生まれ、南アフリカの大地に育った、れっきとした南アフリカ人には違いなかった。

◎父ジェイムズ・ラ・グーマ

ジェイムズ・ラ・グーマは、1984年にケープタウンで生まれた。革職人の徒弟修行を

終えてしばらくしてから、故郷を離れている。ひとりで南西アフリカに行き、ドイツ系移民の経営する農場や、港、ダイヤモンド鉱山などで働くかたわら、労働運動に従事し、ストライキなどを指導した。1924年に共産党に加わり、1933年には活動中に当局に逮捕された。その間、1924年には、当時たばこ工場で働いていたウィルヘルミナ・アレクサンダーと結婚し、翌年、長男アレックスが誕生、8年後には長女ジョーンが生まれている、ラ・グーマ家は、闘争拠点として若き活動家の出入りも激しく、闘争家ジェイムズも忙しかったが、子供の教育への配慮も決して怠らなかった。息子アレックスに政治や文学への関心を植えつけたのも父ジェイムズであったし、アレックスの文才をほめ、育んだのもジェイムズだった。そんな父を、ラ・グーマは次のように語る。

父から受けた影響は非常に強く、そのお蔭で私は自分の哲学観や政治観を持つようになりまし、政治や文学についての堅い作品も読むようになりまし。父自身も、本はむさぼるように読んでいました。成長する過程で、そんな姿に、おそらく、私は何らかの形で感化を受けたのではないかと思います。父は1961年に死にまし。私の処女小説『夜の彷徨』が出る直前のことでした。父は自分の蒔いた種が芽を出して立派に実を結んだ姿を自らの目で確めずに死んでいった、と言えるでしょう。

父親だけではない、ラ・グーマによれば、ウィルヘルミナ・ラ・グーマは「第6区の他の女性たちと同様、辛く厳しい毎日の、ありきたりの雑事をやりこなし」、夫には献身的な妻であり、子供には優しくて心の寛い母親であった。両親の慈愛は、スラム街の生活環境が惨めであればあるほど、ラ・グーマにとってはかけがいのないものであったに違いない。

ラ・グーマに接した人は、一様に、その物腰の柔らかさ、同胞への愛の深さを指摘する。「 Gondwana」編集子の言葉を借りれば、「恐れというものを痛いほど知り、悲しいほど

同胞を愛するラ・グーマ」であった。

アパルトヘイト下の、目をそむけたくなるほど陰惨な実態が克明に描かれている作品のなかに、それでも何かしらホッとする暖かさを読者が感じとるのは、目をそむけたくなる現実に、自ら真っ向から挑んだラ・グーマの慈愛の深さのゆえからだろう。「私にとって写実的表現とは単なる現在の投影ではないのです。その進展状況の中で写実的表現を見るべきです。写実的表現には原動力が含まれています。活力や様々な直接的反応とつながりがあります。写実的表現によって読者に真実を確信させ、何かが起こり得ることをほのめかす必要性があります。その目的は読者の心を動かすことなのです。」とラ・グーマが語り得たのは、統合民主国家の実現を願うラ・グーマが、虐げられた同胞への暖かい目を絶えず具え持っていたからだろう。その願いを慈愛にくるんで作品に刻み込んだラ・グーマ。父ジェイムズ・ラ・グーマと母ウィルヘルミナ・ラ・グーマの存在がなかったら、闘争家アレックス・ラ・グーマも、あるいは作家アレックス・ラ・グーマも生まれなかったかもしれない。

◎少年から青年へ

親子二代にわたった解放闘争も、息子アレックスの時代と較べて父ジェイムズの時代は、締めつけもまださほどきつくはなかった。白人長期政権確立にむけて、多数派黒人と白人との間に位置するカラード、インド人、それに少数の黒人エリート層との協調路線を推し進めていた1890年のセシルローズ政策のなごりが未だ残っていたからである。その政策の下で少年期を過したアレックスは、従って、アジア人や黒人と同地域に住み、毎日一緒に遊ぶことが出来た。当時のことを思い起こしながら、特に仲のよかった一人の黒人少年について、あるインタビューの中でラ・グーマは回想する—

私の家の真向いに住むダニエルという友だちのことを特に憶えています。ダニエルは黒人でしたが、当時は正式な形での人種隔離、つまりアパルトヘイトはあり

ませんでしたから、労働者階層は黒人もカラードもインド人も同地域で一緒に住んでおりました。ダニエルは私とおない年の黒人少年で、二人は大の仲よしでした。ダニエルはすごく生きのいい陽気な奴でしたから、特に私のお気に入り、ずいぶん一緒に遊んだものでした。しかしながら、そのうち居住区の人種隔離政策もだんだんと厳しくなって、ダニエルの家族もその地域から出て行かざるを得なくなりました。ダニエルの家族はケープタウンの郊外のランガというところへ移りました。それっきり、ダニエルとは長いこと会いませんでした。それからずっとあと、私が自活するようになって働きに出ていたある日、突然、再会することになりました。しかし、そのときのダニエルはもはや昔のダニエルではありませんでした。もういっばしのチンピラで、刑務所にも行ったことがあり、これから先にバラ色の未来が開けているとは私にはどうしても思えませんでした。うまくやっていけない環境の犠牲になったかつての友人と再会したのは心動かされる痛ましい経験でした。

徐々に強化されるアパルトヘイト政策によって、仲よしの二人、カラード少年アレックスと黒人少年ダニエルは引き離された。(ダニエルは『夜の彷徨』の主人公青年マイケル・アドニスモデルの一人である)。人種隔離政策は、様々な形で多感な少年の心に深い傷跡を残したが、前号のインタビュー記事にあった「サーカス」の一件もその一つである。諸々の差別を規定したアパルトヘイト法は「サーカス」にまで及び、黒人席に座っていたラ・グーマ少年は、白人と同じ料金を払いながら、演技者たちの背中ばかりを見るはめになった。しかし、その体験が、結果的にラ・グーマの心に「ある程度の政治的意識」を芽生えさせるきっかけになるのだが……。それっきり、南アフリカでラ・グーマがサーカスに行くことはなかったが、亡命後のヨーロッパでサーカス見物に出かけた時のことに触れて「当時はじめて味わった人種差別の体験、その時の状況を、とても悲しい思いで振り返りました」とあるインタビューの中で答えている。(「サーカス」の経験は、のちに

作品の中で少し顔を出す。『季節終わりの霧の中で』において、主人公ビュークが、あるお祭りに出かけた時に「少年の頃、叔母にサーカスに連れて行ってもらったことがあるよ」とほろ苦い思い出を友人に語りかける場面である)

1932年、ラ・グーマはアパー・アッシュリ小学校に入学、ダニエル少年と遊んだのもその頃である。1938年には、トラファルガル・ハイスクールに入学。学業成績は特によくはなかったが、それは関心もつぱら学校の外にあったからである。当時闘争拠点になっていたラ・グーマ家では、ヨーロッパで台頭し、その勢力を拡大して自由主義陣営を脅かしつつあったファシズムが話題の中心であった。当時まだ13歳であったにもかかわらず、アレックス少年はスペイン市民戦争の国際旅団への従軍を志願している。もっとも、13歳の少年の夢が実現することはなかったが。(最近NHK番組「1963年・スペイン」というのがあった。昨年10月に首都マドリッドで行なわれたスペイン内戦50周年記念集会の様や、日本人国際義勇兵の話やら、なかなか興味深かった。クーデターを起こした軍部ファシズムに対抗し、自由を守れ、と子供心にラ・グーマも熱く燃えていたわけだ。「スペインでの出来事が家族の間や家でたびたび行なわれていた会合でよく話題にのぼりました。自分の性格の理想主義的な側面がその出来事から幾分か刺激を受けたのではないかと思います」とのちにラ・グーマは語っている。貨物船で函館からニューヨークに密入国し、某レストランで働いていたジャック・白井という日本人がひとり、アメリカリンカーン旅団の義勇兵として市民戦争に参加した史実と、南アフリカの片隅で、年端も行かぬラ・グーマ少年が志願をした、という史実に、なぜかしら感動を覚えた)

15歳、まだハイスクール在籍中に、第2次大戦が始まった。父親は、エチオピア、エジプトでケープ陸軍兵団員として従軍している。ラ・グーマは再び志願したが、今度はやせ細っていたために入隊を断られ、又も「戦争参加」は果たせなかった。しかし、戦争への関心は消えず、1942年に入学許可認定試験に合格すると、卒業を待たずに学校を離れ、職に就いた。結局、ケープ・テクニカル・カレッジは、のちに、働きながら修了することになる。

最初、ラ・グーマが働いたのはある倉庫で、梱包をしたり家具を運んだりの仕事であった。そのうち、一般労働者のより近くで働きたいとの願いもあって工場で働くことを決意、運よくケープタウンの「メタル・ボックス・カンパニー」で職を得る。約2時間、缶詰用の缶の製造などに携ったが、賃上げや労働条件改善を求めたストライキを先導した委員会の一員であったとの理由で解雇された。しばらく、ケープタウンの商店や石油会社の帳簿係をやったのち、レポーターになる。「メタル・ボックス・カンパニー」で、はじめて解放闘争に関心を持つようになったラ・グーマは次第にストライキやデモなどの労働闘争に積極的に参加するようになった。1948年、アフリカーナの国民党が政権を握ってからはアパルトヘイト政策が強化され、反体制運動に対する弾圧はますます厳しくなっていく。この頃から、ラ・グーマは実質的に闘争家として、民族解放のための闘いの渦中に身を置くことになる。

2. 作家として

◎闘いのさなかに

国民党が政権を取る前年、ラ・グーマは青年コミュニスト・リーグに参加、翌年南アフリカ共産党に修り「第20区」のメンバーになった。1950年の「共産主義弾圧法」によって共産党がその活動を禁止され、弾圧された時、著名コミュニストのリストにラ・グーマの名も記載されていた。

1954年には、看護婦であり助産婦であったブランシ・ハーマンと結婚した。ブランシは、ケープタウンで名高いセント・モニカ産院を卒業したあと、ケープタウンの貧民層のあいだで働いていた。厳しい現状に立ち向かいながら必死に働く日々のなかで、いつしか虐げられた人々の生活地位向上を願って、自ら積極的に政治活動に参加するようになっていた。ハイスクール以来会うことのなかったラ・グーマと再会したのは、そんな政治活動を通してである。ブランシによれば、ラ・グーマは「いつもロマンティストで、最初のデートでプロポーズをしてくれました」とのこと。ブランシはその場で結婚を承諾は

したが、同時に父親を説得しなければ、と覚悟を決めていた。札付きのコミュニストで定職もままならぬラ・グーマだが、きっと私を幸せにしてくれるんだと……。幸い、父親の反対はなかった。ただ、教会で式を挙げるように、との条件が出された。無宗教を任じていたラ・グーマだが、この時ばかりは譲歩し、教会で2人は、無事結婚式を挙げるごとが出来た。そして1956年に長男ユージーンが、1959年には次男バーソロミューが生まれている。(長男は結婚してソ連に在住、次男は東ドイツで写真の勉強中、とのことである)

1954年、ラ・グーマは新しく創設された南アフリカ・カラード人民機構(SACPO)の執行委員会の一人となった。翌年には議長となり、「人民会議」へのSACPO代議長にも選出されている。「人民会議」は、1955年6月25日、ヨハネズブルグ郊外のクリップタウンで開かれ、アフリカ民族会議(ANC)、南アフリカ・インド人会議(SAIC)、南アフリカ労働組合会議(SACTU)、民主主義者会議(COD)、それにラ・グーマの属するSACPOの5組織から3000人の代議員が出席した。会議では「われわれ南アフリカ人民は、つぎの事項を確認するよう南アフリカ全土と世界に宣言する。

南アフリカは、黒人、白人を問わず、そこに住むすべての人びとにぞくし、どんな政府も、全人民の意志にもとづかないかぎり、その権威を正当に主張することはできない。」[野間寛二郎著『差別と反逆の原点』(理論社、1969)に全文訳がある]という言葉で始まる自由憲章が採択された。あらゆる人種が手を携えて集い合った事実は白人政府に脅威を与えた。人民会議は弾圧され、消える運命となったが、28年後の1983年には、統一民主戦線(UDF)として甦り、あらゆる人種、階層の人々が参加、650組織200人以上の大規模な合法的反体制勢力に発展することになる。

ラ・グーマは、しかし、人民会議に出席できなかった。ラ・グーマに率いられた代表団の一行は、ケープ州ビューフォート・ウェストで警察に足止めされたからである。結局は会議に出るはずの週末をトラックの中で眠って過ごすことになった。もっとも、そんなことで代表団の闘争への情熱が萎える筈もなかった。ラ・グーマは、足止めを食った人々の

心境を代弁して「SACPO や他の組織のこれからの課題は、自由憲章をわが国のすみずみにまで浸透させ、現在解放闘争にかかわっていない人びとも自由憲章に具体的に示された考えを知らせていくことである」という新たなる意を表明している。その後ただちに、人民会議を指導した人たちへの政府側の弾圧が開始された。SACPO の議長ラ・グーマの演説や、抗議運動も厳しい当局のチェックを受けるようになった。それでもラ・グーマは「一斉検挙や禁止令や拘禁を強行しても解放闘争を止められはしない」と強調し続け、次々と出される差別法に対する攻撃の先頭に立った。中でも、1956年ケープタウン市当局がバスに於ける人種隔離法の決定を下した際には、当局を烈しく非難し、4月、5月にかけて、バスボイコット運動を指導した。その際には「ケープタウンの人民は、白人政府の人種的狂気に対して、いつでも全面的に反対闘争に入る準備があることを示したのである」という声明を発表している。そして同年のメーデーには次のような激しく挑戦的なメッセージをラ・グーマは贈っている。

この重大な日に、私は南アフリカのすべての労働者と虐げられた人びとに対して、民主的で明るく平和的な未来を願いながら、心よりのご挨拶を申し上げます。本年度のメーデーは、現支配階層と国民党圧制者達によるますますの弾圧により冒瀆されています。警察のテロ行為や暴力行為もおびただしいものがあります。

「白人当局」と「クリスチャン市民」は、鞭やホースや機関銃をちらつかせながら誇らしげに行進しています、しかしながら一方では、自由憲章に新しいいのちを吹き込むために、アパルトヘイトやパス法、それに強制退去、国外追放や経済搾取に反対する虐げられた人びとの勇ましい闘いによって祝福を受け、このメーデーはまばゆいばかりに盛り上がっています。日に日に世界じゅうの虐げられた人びとの連帯は強くなっています。反帝国主義や平和や友交の輪がアフリカからアジアへの広がりをみせています、そして植民地主義的奴隷制や戦争の光は急速に翳りを見せています。アパルトヘイトを打倒せよ。帝国主義と戦争を打ち崩せ！ 新

民主主義と平和と国際連帯に幸いあれ！

ラ・グーマが本格的に創作活動を始めたのは「ニュー・エイジ」からの誘いを受けたのがきっかけである。「ニュー・エイジ」は、既に廃刊に追いやられていた「ガーディアン」及び「アドヴァンス」の精神を継承した進歩的左翼系の週間新聞である。その目標には「良心、出版、言論、集会、運動の自由。民主主義と法律規定の復活。人種間、国家間の平和、すべての人間にとっての政治的、社会的、文化的な平等諸権利と膚の色、人種、信条による差別の撤廃」が掲げられていた。社主は、リベラルなイギリス系白人で、自分たちと同じ文化背景や知性を備えた購読者層にその目標に沿った訴えかけをしたいと願っていた。同時に、非白人社会での購読者を増やすねらいで、黒人社会で活躍できるスタッフを探してもいた。そして、白羽の矢が立ったのが、ラ・グーマである。ラ・グーマは、当時すでに、ケープカラードの社会でかなりの影響力を持っていたし、同系の「ガーディアン」で既にその文才を示していたから、うってつけの人物であったわけである。「『ニュー・エイジ』からの仕事の誘いを受けた時、あれが本格的に私が書き始めた最初です。必然的に、私は机に向かって、短篇を書いたんだ、と今思います」と当時のことをラ・グーマは振り返っている。闘いのさなかに、こうして作家ラ・グーマが誕生した。こののち、闘争家として、作家として、精力的に解放闘争に、創作活動に活躍することになる。

(6月17日)